# 機械学習基礎実践 演習テキスト

荒木雅弘

2018年6月6日

# 第1章

# パターン認識概要

## 1.1 演習の目的

プロトタイプが与えられたという前提で、最近傍決定則を Scilab でコーディングし、パターン認識の基本的な手順を理解します。

### 1.2 準備

演習問題を解く際に用いる Scilab の機能を確認します。

- 1. 変数に行列を代入する
- 2. 行列のサイズを求める (size 関数)
- 3. 行列から特定の行を抜き出す
- 4. 行列から特定の列を抜き出す
- 5. ゼロ行列を作成する (zeros 関数)
- 6. 変数にベクトルを代入する
- 7. ベクトルの大きさを求める (sum, sqrt, norm 関数)
- 8.2つのベクトルの距離を求める
- 9. for 文による繰り返し
- 10. 変数の値を表示する (disp 関数)
- 11. 最小値を求める (min 関数)
- 12. 最小値を与える位置を求める
- 13. 行列を複製する(repmat 関数)
- 14. 行列を結合する
- 15. ベクトルを行列に変換
- 16. ベクトルを文字列に変換
- 17. 正規表現で文字列マッチング

--> M = [1 2 3; 4 5 6]

M =

- .. 2. 3.
- 4. 5. 6

--> [r c] = size(M)

```
c =
 3.
r =
 2.
--> size(M,'r')
ans =
 2.
--> size(M,'c')
ans =
 3.
--> M(1,:)
ans = 1. 2. 3.
--> M(:,2)
ans =
 2.
  5.
--> zeros(2, 3)
ans =
 0. 0. 0.
  0. 0. 0.
--> z = zeros()
z =
0.
--> z(3) = 5
z =
 0.
 0.
5.
--> v1 = [1 1]
v1 =
 1. 1.
--> v2 = [7 9]
v2 =
  7. 9.
--> sqrt(sum(v1.^2))
ans =
 1.4142136
--> norm(v1)
ans =
  1.4142136
--> norm(v1 - v2)
ans =
 10.
--> for i = 1:5
--> disp(i^2)
```

```
--> end
   1.
   4.
   9.
   16.
   25.
--> a = [5 8 7 2 3];
--> min(a)
ans =
  2.
--> [m, p] = min(a)
p =
   4.
m =
   2.
--> repmat(M,[1 2])
ans =
 1. 2. 3. 1. 2. 3.
  4. 5. 6. 4. 5. 6.
--> repmat(M,[2 1])
ans =
 1. 2. 3.
 4. 5. 6.
 1. 2. 3.
  4. 5. 6.
--> f=[]
f =
  []
--> f = [f [1 2]]
f =
  1.
  2.
--> f = [f [3 4]]
f =
 1. 3.
  2. 4.
--> matrix([1 2 3 4 5 6], [2, 3])
ans =
 1. 3. 5.
  2. 4. 6.
--> strcat(string([0 1 0 1 0]))
ans =
01010
--> regexp(ans, '/101/')
ans =
  2.
```

#### 実践演習 1-1

ソースコード 1.1 の (ア), (イ) を埋め, 例題 1.1 の計算過程を実行する Scilab のコードを完成させよ.

ソースコード 1.1 例題 1.1

```
clear;
P = [[0,1,1,1,0,..
      1,0,0,0,1,..
      1,0,0,0,1,..
      1,0,0,0,1,..
      0,1,1,1,0],,..
     [0,0,1,0,0,...
      0,0,1,0,0,..
      0,0,1,0,0,..
      0,0,1,0,0,..
      0,0,1,0,0],...
     [0,1,1,1,1,..
      1,0,0,1,0,..
      0,0,1,0,0,..
      0,1,0,0,0,..
      1,1,1,1,1]',...
     [0,1,1,1,0,...
      1,0,0,0,1,..
      0,0,1,1,0,..
      1,0,0,0,1,..
0,1,1,1,0]',..
     [0,0,1,0,0,..
      0,1,0,0,0,..
      1,0,0,1,0,..
      1,1,1,1,1,.
      0,0,0,1,0];
x = [0,0,0,1,0,..]
     0,0,0,1,0,..
     0,0,0,1,0,..
     0,0,0,1,0,..
     0,0,0,1,0];
dist = zeros();
for i = 1: (\mathcal{P})
    dist(i) = norm(P((1)) - x);
end
[mindist, ans] = min(dist);
disp("Ans = "+string(ans-1))
```

## 実践演習 1-2

ソースコード 1.1 の for ループ処理を repmat 関数を用いた行列演算に置き換えよ.

### 実践演習 1-3

演習問題 1.1 の指示に従い、特徴抽出を行う機能をソースコード 1.1 に追加して、特徴抽出後の特徴ベクトルを用いて識別を行え、ただし、特徴ベクトルは、縦・横の直線数の計算のみでよい。

# 第2章

# 前処理

#### 2.1 演習の目的

画像データを対象に、パターン認識の前処理段階で行うフィルタ処理を Scilab でコーディングし、効果を確認します。

## 2.2 Scilab への画像処理モジュールインストール

Scilab で画像を扱う際には、外部モジュールである Image Processing and Computer Vision Module を使うと便利です。以下の手順でインストールしてください。

- 1. Scilab を起動後、メニューの [アプリケーション] から [モジュール管理] を選択し、モジュール管 理画面を表示。
- 2. 左側ペインから [画像処理] を選択。
- 3. 画像処理が展開され、[Image Processing and Computer Vision Toolbox] が表示されるので、それを選択。
- 4. 右側ペインの [インストール] ボタンを押してインストール開始。
- 5. インストールが終了したら Scilab を再起動し、起動後に"Start IPCV 1.2 for Scilab 6.0"というメッセージが表示されればインストール成功。

## 2.3 準備

演習では、扱いやすい濃淡画像を対象データとします。画像を行列データとして読み込んだ後、各種フィルタ処理を Scilab でコーディングします。

- 1. 画像データを行列として読み込む(imread 関数)
- 2. 画像データを倍精度浮動小数点数に変換 (im2double 関数)
- 3. 画像を表示する (imshow 関数)
- 4. 画像をファイルに出力する(imwrite 関数)
- 5. 中間値を求める (median 関数)
- 6.2 重ループ

<sup>--&</sup>gt;im=imread('test1.pgm') // im は整数 (0~255) の 120x120 行列

第 2 章 前処理 6

```
-->im2=im2double(im) // 整数から倍精度表現 (0~1) に変換
```

-->imshow(im2)



```
-->imwrite(im2, 'out.png') // pgm, jpg, png, bmp, tiff も可
-->a = [5 8 7 2 3];
-->median(a)
ans =
   5.
-->b = [5 8 7 2 3 4];
-->median(b)
ans =
   4.5
-->for i=1:9
--> for j=1:9
--> printf("%3d",i*j)
--> end
--> printf("\n")
-->end
 1 2 3 4 5 6 7 8 9
 2 4 6 8 10 12 14 16 18
 3 6 9 12 15 18 21 24 27
 4 8 12 16 20 24 28 32 36
 5 10 15 20 25 30 35 40 45
 6 12 18 24 30 36 42 48 54
 7 14 21 28 35 42 49 56 63
 8 16 24 32 40 48 56 64 72
 9 18 27 36 45 54 63 72 81
```

# 実践演習 2-1

空欄(ア)、(イ)を埋め、入力画像にメディアンフィルタを適用する Scilab のコードを完成させよ.

```
clear;

// 画像データの読み込み
im = im2double(imread('test1.pgm'));

// 2次元配列 im のサイズ取得
[h w] = size(im);

// 結果格納用の配列 resultim を用意
resultim = ones(im);
```

第 2 章 前処理 7

```
// メディアンフィルタ適用
for y = 2:h-1
    for x = 2:w-1
        resultim( (ア) ) = median(im( (イ) ));
    end
end

// 結果の表示とファイルへの出力
imshow([im, resultim])
imwrite([im, resultim], 'out.png');
```

# 実践演習 2-2

実践演習 2-1 のコードに平均値フィルタ処理を加え、原画像、メディアンフィルタ適用後、平均値フィルタ適用後の画像を並べて結果を比較せよ。

# 実践演習 2-3

入力画像に Sobel フィルタ(第2章講義スライド参照)を適用するコードを作成せよ。

## 実践演習 2-4

実践演習 2-3 のコードに、最大値プーリングを行う処理を追加せよ。

# 第3章

# 特徴抽出

## 3.1 演習の目的

パターン認識の特徴抽出段階で行う標準化と主成分分析を Scilab でコーディングし、多次元データの可視化手順を習得します。

#### 3.2 準備

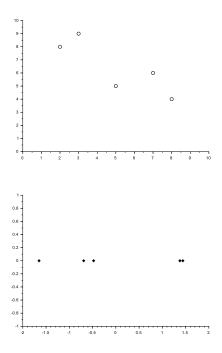
- 1. 平均値を求める (mean 関数)
- 2. 分散を求める (variance 関数)
- 3. 標準偏差を求める (stdev 関数)
- 4. 行列に対し、列ごとに平均値・分散を求める
- 5. 行列に対し、共分散行列を求める(cov 関数)
- 6. 主成分分析を行う (pca 関数)
- 7. 複数のグラフの表示場所を設定する(subplot 関数)
- 8. グラフを表示する (plot2d 関数)
- 9. CSV ファイルを読み込む (csvRead 関数)

```
-->a = [5 8 7 2 3];
-->mean(a)
ans =
   5.
-->variance(a)
ans =
   6.5
-->stdev(a)
ans =
   2.5495098
-->M = [5 5; 8 4; 7 6; 2 8; 3 9]
   5. 5.
   8.
         6.
   7.
    2.
         8.
```

第 3 章 特徵抽出 9

```
3. 9.
-->mean(M, 'r')
ans =
   5. 6.4
-->variance(M, 'r')
ans =
   6.5
        4.3
-->cov(M)
ans =
  6.5 - 4.5
 - 4.5 4.3
-->[1 f c] = pca(M)
                            // 主成分
c =
 - 0.4773960 0.4773960
 - 1.6504435 - 0.0136571
 - 0.6910991 - 0.4183013
   1.3776458
             0.2864548
   1.4412928 - 0.3318924
                            // 固有ベクトル
 - 0.7071068 - 0.7071068
   0.7071068 - 0.7071068
                            // 固有値・全体に対する比
1 =
   1.8511804
             0.9255902
   0.1488196 0.0744098
--> subplot(2, 1 ,1)
--> plot2d(M(:,1), M(:,2), style=-9, rect=[0,0,10,10])
--> subplot(2, 1 ,2)
--> plot2d(c(:,1)', zeros(1,length(c(:,1))), style=-4, rect=[-2,-1,2,1])
--> M = csvRead('iris.csv');
```

第 3 章 特徵抽出 10



#### 実践演習 3-1

ソースコード 3.1 の空欄を埋め、データの標準化と主成分分析を行う Scilab のコードを完成させよ。

ソースコード 3.1 標準化・主成分分析

```
clear;

x=[3 2; 3 4; 5 4; 5 6];
[n d] = (ア) (x);
// 元データの表示
subplot(2,1,1);
plot2d(x(:,1), x(:,2), style=-9, rect=[0,0,8,8])

// 標準化
m = (イ) (x, 'r');
s = (ウ) (x, 'r');
normX = (x - repmat((エ),[n,1])) ./ repmat((オ),[n,1]);

// 標準化後のデータの表示
subplot(2,1,2);
plot2d(normX(:,1), normX(:,2), style=-10, rect=[-2,-2,2,2])

// 主成分分析
[lambda, facpr, comprinc] = (カ) (normX);
z = normX * facpr(:,1);
disp(z)
```

#### 実践演習 3-2

アヤメの分類問題のサンプルデータ iris.csv を読み込み、4 次元のデータを 2 次元で可視化せよ。なお、iris データは、花びらの幅・長さ、萼の幅・長さのデータから、3 種類のアヤメを識別するための学習データである。

# 第4章

# 最近傍決定則

# 4.1 演習の目的

パーセプトロンのアルゴリズムと k-NN 法を Scilab で実装し、学習手順や認識手順を確認します。

## 4.2 準備

```
1. 論理値型 (T or F)
```

- 2. ソート (gsort 関数)
- 3. ベクトルの一部を抜き出す
- 4. ベクトルの指定した要素(複数)をその順番に抜き出す
- 5. 要素数を数える (member 関数)

```
-->f = %T
f =
 Т
-->if f
--> disp(3)
-->end
  3.
-->f = %F
f =
 F
-->if f
--> disp(3)
-->end
-->v = [50 33 89 78 45];
-->gsort(v)
ans =
  89. 78. 50. 45. 33.
-->gsort(v,'g','i') // 昇順'i' を指定するためにはソートの種類(全要素)を表す'g' も必要
ans =
  33. 45. 50. 78. 89.
```

第 4 章 最近傍決定則 12

```
-->[a b] = gsort(v,'g','i') // b は整列後の結果の元の位置
      5. 1. 4. 3.
  2.
a =
     45. 50. 78. 89.
  33.
-->v(1:3) // ベクトル v の先頭から 3 要素
ans =
  50. 33. 89.
-->v([2 1 5]) // ベクトル v の第 2, 第 1, 第 5 要素
ans =
  33. 50. 45.
-->v2 = [1 2 1 1 2 1 1 3 2];
-->members(1, v2) // ベクトル v2 に 1 が各何回出現したか
ans =
   5.
-->members([1:3],v2) // ベクトル v2 に 1 から 3 がそれぞれ何回出現したか
ans =
  5.
       3.
            1.
```

### 実践演習 4-1

パーセプトロンの学習規則を記述した以下の Scilab のコードを完成させよ。学習データは教科書例題 4.2 (p.53) に示すものである。

```
clear;
X = [1.0; 0.5; -0.2; -1.3]; // 学習データ
y = [1 1 2 2]'; // 正解クラス
w = [0.2, 0.3]'; // 初期重み
roh = 0.5; // 学習係数
flag = %T; // 重みに変更があれば TRUE(%T)
[n, d] = size(X);
X = [ones(n,1), X]; // x_-0 軸を追加
while flag
  flag = %F;
  for i = 1:n
    x = X(i,:),
    g = w' * x;
    disp(w');
    if y(i) == (7)
       x = y(i) == (P) & x = x + roh * (P)
                          & (イ)
      flag = %T;
     elseif y(i) == (I) & (I)
       w = w - roh * (ウ)
       flag = %T;
     end
  end
end
printf("Results: w0=\%6.3f, w1=\%6.3f\n", w(1), w(2));
```

第 4 章 最近傍決定則 **13** 

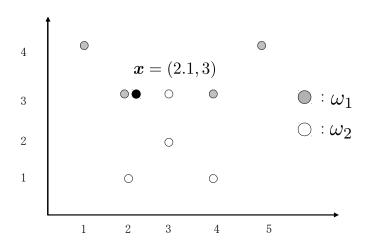
#### 実践演習 4-2

3-NN 法 (多数決) を Scilab を用いてコーディングし, 教科書例題 4.4 (p.59) 中の図 4.17 に示す学習 データを用いて, x=(3,4) を識別せよ.

```
clear;
X = [1 4; 2 3; 4 3; 5 4; 2 1; 3 2; 3 3; 4 1]; // 学習データ
y = [1 1 1 1 2 2 2 2]'; // 正解クラス
k = 3;
x = [3 4]'; // 入力
[n, d] = size(X);
// 入力と学習データとの距離を計算
dist = sqrt(sum((X-repmat(x', [n,1])) .^2, 'c'));
// k-NNによる識別
...
```

## 実践演習 4-3

実践演習 4-2 で作成したコードで、 $\mathbf{x}=(2.1,3)$  を識別すると、ごく近いクラス  $\omega_1$  のデータ (2,3) があるにも関わらず、クラス  $\omega_2$  に識別されてしまう。このようなことを避けるために、近いものから k 個のデータまでの距離の逆数を重みとし、クラスごとの重みの総和で識別結果を出すようなコードに変更せよ。



# 第5章

# 誤差最小化

# 5.1 演習の目的

最小二乗法の閉じた解と最急降下法のアルゴリズムを Scilab で実装し、学習の手順を確認します。

# 5.2 準備

- 1. 行列の転置
- 2. 逆行列
- 3.2つのベクトルの要素毎の和
- 4.2つのベクトルの要素毎の積
- 5. ベクトルの各要素のべき乗
- 6. ベクトルの全要素の和
- 7. 絶対値 (abs 関数)
- 8. 無限大の表現(%inf)

```
--> M=[1 2; 3 4]
M =
    1. 2.
3. 4.

--> M'
ans =
    1. 3.
2. 4.

--> inv(M)
ans =
    -2. 1.
    1.5 -0.5

-->a = [1 2 3];

-->b = [4 5 6];

-->a + b
ans =
    5. 7. 9.
```

第 5 章 誤差最小化 **15** 

```
-->a .* b
ans =
      10.
  4.
          18.
-->a.^2
ans =
      4.
           9.
  1.
-->sum(a)
ans =
  6.
-->abs(-5)
ans =
  5.
-->abs(5)
ans =
  5.
-->c = %inf
c =
  Inf
ans =
 Т
```

## 実践演習 5-1

教科書 p.64 図 5.2 のデータを用いて最小二乗法の解析的な解法を記述した以下の Scilab のコードを完成させよ。

```
clear;
X=[1.0 0.5 -0.2 -0.4 -1.3 -2.0]'; // 学習データ
y=[1 1 0 1 0 0]'; // 教師信号
[n, d] = size(X);
X = [ones(n,1), X]; // 特徴ベクトルに0次元目を追加
w = (ア);
mprintf("Results: w0 = %6.3f, w1 = %6.3f\n",w(1), w(2))
```

# 実践演習 5-2

Widrow-Hoff の学習規則を記述した以下の Scilab のコードを完成させ、異なる初期値・学習係数での 学習結果を確認せよ。

```
clear;
X = [1.0 0.5 -0.2 -0.4 -1.3 -2.0]; // 学習データ
y = [1 1 0 1 0 0]; // 教師信号
[n d] = size(X);
X = [ones(n,1), X]; // x_0 軸を追加
eps = 1e-8; // 終了判定の閾値
differ = %inf; // 二乗誤差の変化量
olderr = %inf; // 前回の二乗誤差
w = [0.2 0.3]; // 初期重み
```

第 5 章 誤差最小化 16

# 実践演習 5-3

教科書 p.112 図 8.4 のデータを用いて、最小二乗法の解析的な解法で識別面の方程式を求めよ。ただし、教師信号は教科書 p.65 の脚注に従い、1 と-1 にすること。また、クラス  $\omega_2$  に点 (3,3.9) を加えた場合に識別面がどのようになるか観測せよ。